



教皇様の教

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可済
©1989
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

生においても死においても 私たちは主のもの

1 「地とそこにあるもの、(…)すべて主のもの」(詩篇23:1) 詩篇作者の言葉に合わせて、教会は創造と贖いの秘義が示す真理を宣言します。

「世とそこに住む者、すべて主のもの」(同) 今日、今日の典礼の詩篇は、諸聖人の祝日に、みごとに反映されています。しかしこの墓地では、この詩篇も少し違っています。明日の死者の日を思い、今日ここにやってくる来し。この時期、私たちは亡くなった人たちのことを偲びますが、とりわけ今年には三十周年を迎える教皇ピオ十二世のことを思い出します。ヴェラノ広場に建てられた彼の像を見てみると、サン・ロレンツィオ地方の人々にとって痛ましく悲しい事件が起きたときに彼がここを訪れたことを思い出します。人間は(…)主のもの!

2 人間、特に現代人は、自分自身のだと信じる傾向にあります。これは創作的思考の産物であり、それを自らの目的と利益のために変形させた結論です。この考えを基に、人生の意義、願望と活動の目標を定めています。でも、死によって終了するまでのこと。死によってすべては終わってしまいます!

今日と明日、私たちは、ローマのヴェラノ墓地、それぞれの町にある墓地、世界中の墓地を訪れることでしょうか。それは単に死者が葬られている場所に向うだけの巡礼なのでしょうか。どの墓地も、呼ばれた(人)の終りを証しているだけなのではないでしょうか。「ちりであって、ちりに返るべきものよ」(創世の書3:19) 地に戻れ、という言葉を確認するにすぎないのでしょうか。

3 今日の典礼は、そうではないと教えています。「天とそこにあるもの(…)すべて主のもの」であると告げているのです。死んだのち、知られているか否かを問わず沢山の墓地に送られる人間は、主のものです。人間は主のものなのです。

今日の典礼は新たな展開について教えています。つまり、死の力につつまれたもの、動かなくなったものの世界に入りこむもう一つの展開、もう一つの存在の仕方について明らかにしてくれるのです。今日の典礼朗読すべてが、これを伝えてくれます。中でも答唱詩篇と黙示録が明快に語っています。「すべての国と民族と民とことばの、おびただしい数えきれぬ大群衆が現れるのを見た。彼らは白い服をつけ、手にしゅろの杖を持ち、玉座の前と小羊の前に立ち、(…)黙示録7:9) 地上の生涯を、棺のふたと墓石で閉じた人々とは誰でしょう。「それは、ヤコブの神を求めめる者の(…)」(詩篇23:24・6)と詩篇作者は答えます。死んだのち体が墓にはいった人々とは誰のことでしょう。それは小羊

の前に立ち、大声で「救いは玉座に座られるわれらの神と小羊のものである」(黙示録7:10)と叫ぶ人々と黙示録は答えています。 私たちに先立った兄弟姉妹の不在を思うとき、今日の典礼の言葉が新たな存在——神の御前、小羊の御前における存在——を明かしているのに気づくのです。

5 神の小羊は、信仰の光のうちに経験できる墓所の中心におられ、至福八端の道を人間に開いてください。 「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう」(マテオ11:28) 小羊のうちに、御父は至高の愛を私たちに与えてくださいます。「神の子と称されるほど(…)」私たちが神の子である。(ヨハネ1:3・1) 十字架と死と復活によって、小羊、イエズス・キリストによって!

黙示録には次のように記されています。「白い服をつけたこの人はだれか。どこから来たのか(…)」彼らは大きな患難を抜けた人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くした。(黙示録7:13・14) 私たちのまわりの墓所や墓石には十字架の印がついていますが、この印はキリスト信者の死を表しているのですが、単にそれだけではありません。それは、小羊・この世の贖い主、人間の贖い主であるイエズス・キリストを証しているのです。

6 神の「聖所」について、すべての人、一人ひとりに教えているのです。(詩篇23:24・3参照)そこへ、人はキリストのうちに、呼ばれています。まことに「地とそこにあるもの、(…)すべて主のもの」 十字架とは小羊の象徴、キリストについての証言なのです。(八八・十二)

キリストのとりなし

——生きる者、死せる者のために

本日教会は諸聖人の祝日を祝います。マリアを筆頭に、私たちに先立ち、キリストによってあがなわれ、今は幸福のうちに神を見奉る人々の祝日です。「彼らは大きな患難を抜け出た人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くした」(黙示録7:14)と記されていますが、今日の祝日、この白い服は幾千もの光を放って輝いています。彼らは「すべて

〈待降節〉

真の喜びの源に戻ろう



1 「私の精神は救い主である神により喜びおどります。(ルカ1・47)

待降節の第三主日は、いつもより特別な喜びを含んでいます。まず、贖い主の御母の言葉からこの喜びの表現を借りています。御母の(ヘマニフィカト)は、待降節の喜びを独特で熱烈な、そして深遠な言い方で表わしています。その言葉は答唱詩篇に靈感を与えるのです。「私の精神は救い主である神により喜びおどります。…全能者が私に偉大なことをされたからです。(ルカ1・47、49)

処女である御母の喜びは、自分が神に特別な好感をもたれていることに気づいたために生じます。これは聖霊における喜びであり、喜びがこれ以上ない程に満ち満ちている喜びです。

ナザレトの処女は言い表わせない程の神の賜を内に持っています。彼女は永遠のみことばである御子の母なのです。すでにその御胎内に御子を宿しています。そしてこの賜は、私たち皆のためでもあります。「まことに、主は近い」(フィリッピ4・5)のです。

創造された世界の只中(ただ)にいることを知っている私たちは、この世を超えていく喜びに招かれています。これが待降節の喜びなのです。

同時に典礼の奥底から私たちが一つの問いが出されています。この問いに答えるためには、(ヘマニフィカト)の内容に従ってもう一つの問いに答える必要があります。全能の御方が私たちにされた偉大なことを魂の目でもって、信仰の目でもって、発見することができたらどうか、と。

この問題は全ての人にとって重要なことです。人間が喜びを見出すことができるのは善の中だけです。悪は悲しませ、落胆させます。善は喜ばせ、勇気づけます。贖い主の御母の口を通して典礼で宣言された喜び、(この喜びに加わるため)に「私たちはその根源が神に在る善を見なければなりません」。つまり、創造の善を、贖いの善を、御託身(受肉)の善を見なければなりません。神が人間になるといふ驚くべきことを実現させてくださったのです。喜びの根源に焦点を合わせて見ることができそうです。この根源に立ち返ることができそうです。

私たちの主・救い主イエズス・キリストの御名において、皆さんに挨拶を送ります。それと同時に、主が皆さんの信仰を強め、キリストの体(神秘体)すなわち教会に対する愛を深めてくださるよう、祈りたいと思います。ローマ巡礼は教会への愛を深めるためのまたとない機会です。私はこの恩寵を皆さんひとりひとりにお与えくださるよう、主にお願ひします。

2

パリウムの授与はローマの司教とそれを受ける首都大司教との間の一致(交わり)のしるしです。それは司教団内の兄弟愛を示す特別のしるしです。パリウムを目にするにによって教会の真のカトリック性(普遍性)を示すもの、すなわち信仰と

司教様方のパリウムとは?

交わりによる一致が地域や国の境を越えていることを思い出すことができます。霊的な一致(交わり)はキリスト御自身に根差しているからです。私たちを集めて一つの聖なる民とし、それぞれの奉仕と聖務に位階上の違いがあるとはいえず主への愛と奉仕において一致させてくださるのは、キリストであらせられるからなのです。自国に戻られたとき、兄弟姉妹を励まし、教会の一致と普遍性の秘義をより深く知り体験することができるよう、助けてあげてください。

(…)教会の母にしてキリストの御母、処女マリアが皆さんを導き、守ってくださいますように。(六・三十一)

を得たものです。

4

その上私たちはこの期間のもう一人の主役によって、待降節の道に導き入れられます。すなわちメシアの先駆者、ヨルダン川での洗礼者ヨハネです。

「あなたは誰ですか?」

「主の道を正しくせよ」と荒野に叫ぶ者の声とは私のことである。(ヨハネ1・22、23) 預言者イザヤはすでにこのように語っていました。ヨハネは神聖な待降節のあの預言者の強力なごたまなのです。

「この人は光ではなく、光を証明するために来た」(ヨハネ1・8)と

もう一人のヨハネ(福音史家)が書

は愛によって私たちと結ばれ、私たちのために取り次ぎ、助けてください。これは言いようもなく素晴らしい。これは聖徒のまじわりの秘義の表れです。この世を旅する人々、清めを受ける途中の人々、光栄に入った人々、皆がこの秘義のうちに、つよく結ばれています。(『教会憲章』49参照)

この密接な結びつきを通して、私たちより先に、私たちが信じるすべてのことを信じ、今は天国において私たちの友人・仲介者となった聖人たちと、さらに親しく交わりましょう。

諸聖人の祝日の祝いは、まだ完全に神の御顔を見ず、清めを受けるべく準備している亡くなった信者たちを記念するためでもあります。今日と明日、墓地を訪れ、すでに世を去った人々の墓前で、彼らも早く主の永遠の栄光にあずかれるよう、一致と交わりのうちに取り次ぎを願い、祈りを捧げましょう。亡くなった私たちの友人もまた、教会が確認する愛の徳において私たちのために取り次いでくれるでしょう。

信仰篤いキリスト信者として振舞いつつ、この二日間を過ごしましょう。ミサ聖祭にあずかりましょう。そこで、キリストは生ける人と死せる人との仲介者となられます。亡くなった人々の靈魂を「諸聖人の元后」と呼ばれる聖母に委ねましょう。他のどの被造物よりも聖性においてすぐれた御方、恩寵に満ち満ちた聖母。聖堂や墓所にある聖母の姿、その聖母にとりなしを願い、亡くなった人々を神のおん憐れみに委ねましょう。

「主の道を正しくせよ」と荒野に叫ぶ者の声とは私のことである。(ヨハネ1・22、23) 預言者イザヤはすでにこのように語っていました。ヨハネは神聖な待降節のあの預言者の強力なごたまなのです。

「この人は光ではなく、光を証明するために来た」(ヨハネ1・8)ともう一人のヨハネ(福音史家)が書

説教・講話・書簡等の抄訳

いています。このようにして典礼はイザヤの「預言」からヨルダン川のヨハネの「証言」へと導きます。

両者を通して私たちは処女マリアの心に到ります。マリアにとって待降節は「待っている時」のみならず「成熟の時」をも意味します。すなわち、神は「単しい」はしのために御目をとめられた。(…)代々の人々はマリアを「幸いな女」と呼ぶことでしよう。(ルカー1・48参照) まことに全能の御方はマリアに、そしてマリアにおいて「私たち全員に」「偉大なこと」をなさったのです。

5 ですから、これこそ想像もつかないほどの喜びの源なのです。この源から喜びを引き出すことができますか？ 私たちはナザレトの処女の宣言されたあの喜びの只中にいるのでしょうか？(…)

これは全て「私たちの信仰の目」にかかっています。神が私たちになさった「偉大なこと」を、私たちが内的に敏感な心で感じとるか否かにかかっているのです。パウロはある意味で、この霊的喜びを手に入れるための方法を、私たちの内的生活にこの喜びを発見する方法を教えてください。(「処方箋」は簡単です。「常に喜べ。絶えず祈れ」(テサロニケ①5・16、17) 私たちはこれを次のように解釈できます。「霊的喜びを経験したいなら、祈りを通してその源に行きなさい。」何と大勢の男女が、何と多くのキリスト信者がこの方法を立証したことでしょう！ 何と大勢の人々がこの方法の適切さ、その効力を確認できることでしょうか！

(十二月十三日)

イエズスの聖心 —アンジェラス・メッセージ—

「天主の御言葉と合体せる
イエズスの聖心、
われらをあわれみ給え」

● (イエズスの聖心) という言葉
を聞くと、すぐにイエズスの人間性と共に、主の豊かな感情の動きを思い出します。病に伏す人々に同情し、貧しい人々を特に愛し、罪人を憐れみ、子供たちを暖かく受け入れ、高慢と暴力と偽善を公然と非難し、敵に対して柔和に接し、御父の光栄を熱烈に望み、御自分の恩寵の神秘的で摂理的な計画をお喜びになります。

● 御受難との関係を考えれば、(イエズスの聖心)は、ユダの裏切りに対する悲しみ、孤独な状態からくる心痛、死を前にした時の苦惱、御父の手にすべてを委ねる従順を思い起こさせます。また、いずれを見ても、心の底から絶えず湧き上がる愛、御父とすべての人間に対する限りない愛について語りかけてくれます。

● この人間的に真に豊かな聖心は、連禱にあるように、(神のみことば)のペルソナ(位格)に「結ばれて」います。イエズスは託身(受

肉)された神のみことばです。イエズスは、神性と人間性という二つの本性の中に存する唯一のペルソナ・みことばの永遠のペルソナを有しておられます。イエズスは、神性においても人間性においても完全であら

● イエズスの聖心と神のみことばとの一致のおかげで、神はイエズスにおいて人間と同じように愛し、人間と同じように苦しみます。またそれとは逆に、人間としての愛と苦しさと栄光は、イエズスにおいて神の強さと力を得るのです。

● 聖母マリアと一緒にキリストの聖心に目を向けましょう。聖母は御子イエズス・キリストの傍らで信仰の日々を生きておられました。御子の体が汚れない処女の体か

ら出たことを知っておられましたが、同時に、イエズスは(いと高き御者の子)であるゆえ、限りなく聖母御自身を越える御方であることも良く理解しておられました。御子の聖心は(神のみことば)に一致しておられたので、聖母は御子を自分の子として愛するとともに、主なる神として礼拝しておられました。私たちも人間であると同時に神であらせられるキリストを、「すべての心、すべての霊、すべての知恵をあげて」(マテオ22・37参照)愛し、かつ礼拝できるように、聖母の御助けをお願いしましょう。このように聖母マリアの模範に倣うなら、私たちは御子の聖心の、神として、そして同時に人間としての特別の愛を受け取ることができるよう。

御父は
御子の聖心を通して
来られる
(八九・七・九)

◆ 永遠の御父の御子、イエズスの聖心。
教会は至聖なる三位一体の神、御父と御子と聖霊に近づく道をイエズスの聖心に見出します。
この唯一にして三位の神は、口にするのものはかられるほどの信仰の秘義です。
まことに神は「近づけない光のうちに住んでおられる」(ティモテオ①6・16)
同時に無限の神は、ナザレトのイ

エズス・キリストの聖心に御自分を抱きしめられるがままにまかされた。神なる御父は、御子の聖心を通して私たちの心に近づき、私たちの心の中へおいでになります。
ですから私たちは、「御父と御子と聖霊のみ名によって」洗礼を受けるのです。私たち一人ひとり、その最初の始めから、唯一にして三位の神、つまり生ける神、生命を与える神の中に浸されるのです。この神を私たちは御父と御子から出る聖霊、「生命の与え主」と信じ、宣言します。
◆ イエズスの聖心は「処女マリアの胎内で聖霊によって形造られ」ました。
「生命の与え主」であり、「人間に自らをお与えになる」神は、人間になることによって、救いの計画による御業をお始めになったのです。

「処女マリアの胎内で聖霊によって形造られた」イエズスの人間としての心は、処女懐胎、マリアからの誕生以来、働き始めます。
この月、私たちが崇敬したいのはこの聖心です。この聖心に、様々な試練を受け、抑圧されている哀れな人間の心の受託者になってくださるよう、望みます。同時に私たちの心は、神御自らの力に信頼しています。
至聖なる三位一体の救いの力に、御子の聖心を私たちよりもよく御存じのマリア、処女なる御母よ、至聖なる三位一体の礼拝に、教会と世界のための私たちのへりくだった祈りに、どうぞ加わってください！
御身だけが、私たちのこの祈りの導き手なのです。
(三位一体の祝日に)

3 教皇様の聲

不変の教え

キリストにおいて兄弟姉妹である皆さん。

●「あなたは汚れのないかた、マリア」無原罪の御宿りの祝日の今日、私たちの心は神秘的な喜びで満たされ、聖アンセルムと共に声を合わせて呼びかけます。「恩寵に満ちたかた、女のうちに祝福されたかた。御身の祝福をもって、主はすべてのものを祝福してください。そして創造主は、すべての創られたものから称賛(祝福)をお受けになります。」(Disc. 52, PL 158, 955-956)

マリアは私たちと同じ人間でありながら將來、神の母となるはずだったので、(原罪)を免れていました。私たちはこれを啓示によって知っています。第二バティカン公会議が確認しているように、マリアは真に美しく、至聖にして汚れなく、崇高な威厳と真の尊さを備えておられました。(『教会憲章』56参照)

●聖母の無原罪の御宿りは、キリスト教信仰のすばらしい教義上の統合といえるでしょう。そこには啓示された事柄のうち根本的な真理が含まれています。罪のない(原義の)状態で人祖が創造され、のち罪によって人祖とその子孫がもとの状態を失ってしまったこと。原福音においてアダムとエバになされた最初の約束と、マリアの汚れのない胎内におけるみことばの受肉、

原福音と無原罪

つまり約束の成就。さらに、永遠の滅びに向かう絶望的な状態と、最終的な救いにより、神の至福を享受する希望。これらの真理がすべて含まれています。

●兄弟姉妹の皆さん。日々の生活において困難のただなかにいるとき、マリアに心を向けましょう。マリアは優しくも厳しい愛で、神の御旨を思い出させてください。原罪によって起る困難に負けることなく、聖性に向かえというものと

もとの御計画を実現させよと神は仰せになられているのです。私たちが自分の弱さと戦うとき、マリアは近くにいるように感じます。「あなたは汚れのないかた、マリア、罪人の抛り所。」
どうか、無原罪の御宿りを祝うことによって私たちの心が動かされ、マリアの素晴らしき輝きで満たされましよう。ちょうど「聖母の騎士」聖マキシミリアン・コルベが願ったように。アウシュビッツに囚われていた一九四一年五月十二日、彼はネボカラノの同僚に手紙を書き送りました。「『汚れなき聖母』によって、どこへでも、どのようになでも、お望みのままに、いつも完全に導かれますように。そうすれば、仕事を果すうちに、すべての人がマリアの愛の虜になる手助けをすることができるのですから。」(十二・八)

キリスト教的な徳の実行と

聖なる畏れの賜

北ヨーロッパへの使徒的旅行を終えた今、委ねられた司牧の使命を実現できたことを主に感謝しています。皆さんも私の感謝の祈りに心を合わせてくださればと思います。

今日は、聖霊の賜についての考察を結びたいと思います。これらの中で最後に記されているのが聖なる畏れの賜です。

聖書には、「主への畏れは知恵の始まりである」(詩篇111:10と格言1:7参照)とあります。ところで、どのような畏れのことを言っているのでしょうか。それは勿論、うろたえさせたり混乱させたりする物や人から恐れをなして逃げるという意味で、「神を恐れる」ことではありません。このような畏れは、罪を犯したあとの人祖が「園の木々の間に逃げ隠れた」(創世の書3:8)ときの恐れにほかなりません。それはまた、預かったタレントを土の中に隠した不忠実でよこしまな召使の気持でもありました。

以上のような畏れは、聖霊の賜の一つである聖なる畏れとは違うものです。これはもっと高貴で崇高な賜です。それは、途方もない神の威光を前にして感じる、誠実な畏敬の念のできぬ永遠の審判のとき「目方が不

足」(ダニエル5:27)しているかもしれない危険や自らの不誠実を思っ感じる畏れのことです。信じる人なら、「悔い改め、へりくだる魂」(詩篇50:19)で神の御前に立ちます。「畏れおのいて」(フィリッピ2:12)自らの救いを待つべきことを知っているからです。しかし、それは分別のない畏れではなく、法に対する責任感と忠実のことなのです。

●これらすべては、聖霊が聖なる畏れの賜をもって取りあげ高めてくださることがあります。犯した罪に気が付き、神の罰を恐れて抱くことがなくなるわけではなく、私たちが一人ひとりの永遠の救いをお望みになる神の父としての心遣いと慈しみを信じることによって、その恐れも小さくなるはずで

す。しかし、聖霊がこの賜と共に靈魂に注入してくださるのは、中でも神の愛に根差した子としての愛です。かくして私たちは、父として愛する御方の不興を買わぬよう、何事においても神を侮辱することのないよう、また「神のうちに」とどまり、愛徳に成長するよう望むのです。(ヨハネ15:4-7参照)

謙遜と節制、貞潔、感覚の犠牲などのようなキリスト教的な諸徳は、心の中で神への愛と結び付き、この聖なる畏れの御蔭で実行

できるようになります。聖パウロの勧告を思い出しましょう。「この約束を受けているのであるから、至愛の者よ、自分の肉体と精神のすべての汚れを清め、神を恐れつつ成聖の業を成し遂げよ。」(コリント2:7-11)

これは、いとも簡単に神の法(おきて)を破り、その罰を無視したり反抗したりする私たちのための警告です。人々の上に聖なる畏れの賜を豊かに注いでくださるよう、聖霊にお願いしましょう。天使の告げを受け、課せられた責任の重さに「心を騒がせた」けれども(ルカ1:29)、信仰と従順と愛から「なれかし」と応えることができた御方の執り成しを得て、聖霊にお願いすることになります。(八九・六・十一)

—年間購読申込要領—
●1,500円(年間購読料900円+送料600円)を郵便振替にてお送りください。
●教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込みください。
見本紙は41円切手同封で、ご請求下さい。
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船場町12-6 ☎0797-31-3452

教皇様の声
年間購読者募集中
日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇様は、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費
■二年予約九〇〇円 送料六〇〇円
■二十部以上一括購入なら送料不要
郵便振替
3-72393